講演録
LETTERS

TU-RIPS 第 14 回セミナー講演録[1]

政治学を実践する

（2024 年 12 月 20 日開催）

Lecture on the 14th TU-RIPS Seminar

From Political Science to Politics

(December 20, 2024)

蒲島郁夫[2]

Abstract

Former Kumamoto Governor Ikuo Kabashima delivered his talk titled “From Political Science to Politics” to approximately 100 sophomore students at Tsuda University. A political scientist specializing in voting behavior, he shared his first election campaign strategy, which focused on gaining maximum votes from diverse voter groups across political parties and ensuring that candidate evaluations were meaningful. His unique life journey, from a poor childhood in a rural Kumamoto village to becoming a professor at the University of Tokyo with a Ph.D. from Harvard, shaped his approach. As a governor, he applied several political theories, including Neustadt’s leadership theory, which posits that a leader must set policies within six months, and Huntington’s gap theory, which suggests that leaders must meet citizens’ expectation without fueling dissatisfaction. Dr. Kabashima emphasized the importance of remaining hopeful in the face of challenges and making the impossible possible to enhance our lives and happiness.

1. 実践者から見た圧勝の政治学

本日のテーマは「政治学を実践する」です。政治学者が政治を実践する場というのはほとんどありません。私は選挙に出馬するときに、いつ大学教授という職を辞すべきかということを学部長に聞きました。すると、東大法学部というところは前例を大事にするところですから、「これまでの東大の歴史の中で現職教授が選挙に出たケースで、東京大学がどのような対応だ

[1] 本講義録は読みやすくするために、編集を施している。講義録作成には松村若菜氏（津田塾大学総合政策学部 1 年）、榊原千尋氏（津田塾大学総合政策学部 3 年）の協力を得た。ここに感謝を記したい。編集の責任は中條美和（津田塾大学総合政策学部准教授）にある。
[2] 東京大学先端科学技術研究センターフェロー・前熊本県知事

2025 年 1 月 19 日受理、2025 年 1 月 22 日採択、2025 年 1 月 22 日公開。

ったかということを調べるので待ってください」と言われました。明治以来、東大全学部で、現職教授で出馬した人がいたかを調べたところ、1 人もいなかったそうです。そのくらい、東大から教授が選挙に出るのは珍しい事でした。そこで学部長は私に「あなたは最初の前例なので大事にしなければならない。今は政治参加を大事にする時代になったので（選挙の 3 週間前の）告示日までは教授の仕事を続けてください」と言われたのです。通例、選挙に出る教授は早く辞めるもので、出馬の意志を明かしたときに辞職するのが慣例ですが、例外として私は選挙の 3 週間前まで、法学部の名刺を持って歩いていました。ただ、学部長は「あなたは国から給料を貰っているので、（選挙のために）年休を取っていても、一日だけは出勤して大学入試センターの監督をやってください」とも言いました。だから、候補者でありながら入試センターの監督も務めました。当時の様子を新聞記者や雑誌記者が写真を撮っていたら特ダネになっただろうと思うけども、幸い写真を撮られることがなかったので良かったなと思いました。そのような特殊な経歴を持っているという意味では、「政治学を実践する」非常に珍しい政治学者ということで、今日はそれを考え、皆さんに政治学者が観察した政治の本質をお話しします。

大前提として、私は投票行動の専門家です。当時、色々な人が、私が選挙に出ることに反対しました。一番反対したのは家族。二番目に反対したのは、私の授業を取り政治学者になった教え子達です。大学で教えている政治学者は、「先生、それだけはやめてください」と。「投票行動の専門家が、もし選挙に出て負けたら、蒲島理論は否定されてしまう。そうなったら自分たちは食べていけない」と言ってみんな反対するのです。そこで私は「この選挙で圧勝します。そうすることによって蒲島理論が正しいということを証明したい」と言いました。とはいえ私を含め 5 人の候補者が出ており、他 4 人の全員が有力な候補者でした。その中で圧勝するというのは、到底容易なことではないと誰もが考えていたのではないかと思います。では、どのような形で圧勝したかを、投票行動の理論家として、皆さんにここでお教えしたいと思います。

まず、投票行動の理論を考えると、圧勝するためには何が必要か。圧勝の条件とは、ただ当選することだけではないのです。そこで、投票行動の理論を勉強した人はわかると思いますが、今から挙げる三つの要因が重要です（スライド p.2）。

第 1 番目の要因は、どういう候補者かという候補者要因です。これが一つの大きな要因として、皆さんの投票行動に影響を与える。2 番目は、どのような争点を設定するか、これがまた大きな役割を果たす。3 番目の要因で一番大事だと言われているのが、どの政党から出るか。

私は、この三つの中で圧勝するためには、政党要因だけでは駄目だと思いました。第一に熊本は、自民党が強い県です。その熊本から出るので、自民党が公認したい、推薦したいと言ってきましたけれども、それは私の方からお断りしました。ただ勝つだけならば楽だったかもしれないけれど、私は圧勝しなければならなかったからです。圧勝するために一つの政党に頼ってしまうと、残りの政党を推す人はみんな離れてしまう。故に、圧勝できない。そういう意味

では、圧勝するためには政党要因を戦術から外さねばならない。2 番目に、良い政治をするためには、「精神の自由」が必要なのです。自民党の支援を受けると自民党の党議拘束が出てくる。その場合、「真に自由な政治」ができなくなってしまう。そこで、大事な「政治的中立性を保つため」と「圧勝するため」に政党要因を外しました。

そこで、何を以て圧勝するかということを考えたときに、一番重要なのは、「私という候補者はどういう人かを有権者の皆さんに知ってもらうこと」、これが大事だと考えました。そこで、私が重視したのが候補者要因であります。私はとてもユニークな経歴を持っています。それを圧勝要因として採用しようと考えました。そして政党要因と争点については、それほど触れなかった。

2. 2008 年知事選挙と候補者要因

2.1. 生い立ち

私が生まれたのは 1947 年 1 月 28 日、もうすぐ 78 歳になります。そして私の人生というのは、「夢を持って、逆境に立ち向かう」ような人生だった（スライド p.3）。

私は、熊本県の山鹿市、旧稲田村出身です。稲田村という、その響きからわかりますよね。本当の田舎です。その村で 9 人兄弟の 7 番目として生まれました。私の両親は戦後、植民地だった満州から引き揚げてきました。6 人の子供を連れて引き揚げてきたのです。普通は 6 人も子供がいたらそれ以上は生みませんよね。でも、日本に帰ってから 3 人生まれたのです。それで 9 人兄弟の 7 番目ですから、日本に帰って最初の子供が私です。そういう家に生まれましたので、家族は食糧の調達には大変苦労しました。私の祖母が 1 人で 22 アールの田んぼを耕していました。そこに、9 人兄弟と両親が加わったので、全く食糧がないわけです。それで家族全員で新聞配達をして家計を助けました。私は小学校 2 年生から高 3 まで、雨の日も、風の日も、11 年間休まず新聞配達をした。そんな家だったから、勉強なんか全くしないわけです。私はずっと小中高と、ちっとも勉強したことがありません。通知表の 5 をもらったのは 1 回だけです。見るとわかりますけど（スライド p.3 写真）、この友達はいいところの子どもなのです。洋服を見ても全く、ほら、私だけがみすぼらしいのを着ていますよね。そんな感じで生きてきました。

そして、通った高校が、鹿本高校というところです。熊本県でもあまり有名な高校ではありません。当時、他の高校生と違ったのは、私は本を読むのがとても好きだったことです。本を読むのがとても好きだったので、将来は、小説家になりたいなと思っていました。また、プルターク（プルタルコス)の英雄伝を読んで、カエサルのような素晴らしい政治家になりたいとも思った。そして、私の家から高校まで行く間に、一本松という古墳がありました。私は学校に行かずにここで寝転んで昼ご飯を食べて帰宅するという、常に夢を見ていたような高校生だっ

たんです。あと 3 日、高校に行かなかったら卒業できなかった。でも今考えると高校に行かずに毎日本を読んで、夢を見ていて良かったなと。それが私を作ったなと、このように思います。

そして、高校を卒業して、大学という選択肢はありません。そこで私は、稲田村農協というところに勤めました。稲田村農協の職員はこんな格好をして（スライド p.5 写真左上）、肥料の配達をしたり、プロパンの配達をしたりして、農協職員として勤めるわけです。これが、私が 18 歳から 20 歳までの姿です。

2.2. 渡米

しかし、私は考えた。21 歳のときに、このまま農協の職員でいいのかだろうかと。もっと大きな希望を持った方が良いのではないかと思うようになった。そこで私は 21 歳のときに農協を退職し、農業研修生としてアメリカに渡りました。今でも中国とかベトナムから日本に農業研修生が来ますけれども、同じように、研修生とは名ばかりで安く使えた労働者であったわけです。

これは私がアメリカのアイダホ州で、農業研修をしている写真です（スライド p.5 写真右下）。一応カウボーイハットをかぶっているけれども、実際は写真に写っている羊を飼ったり、あるいは牛を飼ったりしていました。そういうふうな生活を送って、2 年間、アメリカで農業研修生の仕事をしました。

そして、アメリカに行って良かったなと思ったのは、アメリカの研修生活の中で、3 ヶ月間だけ、ネブラスカ大学の農学部で学科研修があったことです。そのときの先生たちがここ（スライド p.6 写真右下）に写っています。これがハドソン先生という、私が農業研修生だったときの先生です。初めてアメリカで勉強して、「なんと学問というのは楽なんだろう」と思ってですね、もう少し勉強したいなと。そこでハドソン先生とフーバー先生にお願いして、「次の年の農業研修生の通訳として雇ってください」とお願いしました。そしたら、ハドソン先生とフーバー先生の 2 人が「わかった」と。「お前はよく勉強したから、アイク（蒲島氏の愛称）が来年帰ってきたら、次の農業研修生の通訳として雇ってあげよう」ということを言っていただいた。

そこで日本に帰り、義兄が名古屋で牛乳の販売店をしておりましたので、この義兄が「半年間働いたら、片道切符を買ってあげよう」と言ってくれた。私は義兄のもとで半年働いて片道切符を持って、次の年の農業研修生の通訳として渡米しました。そこで、研修生の通訳をしながら、アメリカの大学入試を受けたんです。ネブラスカ大学の農学部を受験しました。

アメリカの入学試験は 2 科目です。受験科目は英語と数学で、英語はアメリカ人が受ける英語なのでなかなか難しい。数学は、全然 24 歳まで勉強したことがないので、全くできなかった。そのため、この受験には失敗しました。

でも皆さんに「希望をもって生きていれば、必ず助けてくれる人がいる」と言いたいです。

この先生方が、私のために、ネブラスカ大学の入試担当者のところ行って、「蒲島はやる気がある男で、将来性のある男だからチャンスを与えるべきだ」と言ってくださった。日本では当然そんなことはないと思いますけれども、アメリカは違った。2 人の熱心な交渉のお陰で「1 学期だけチャンスを与えよう」と。1 学期だけ、ネブラスカ大学の農学部に入学させようと言ってもらえました。1 学期は大体 4.5 ヶ月ぐらいですから、4.5 ヶ月間、私は必死で勉強したんです。当時は仮入学の立場だったので、そこで良い成績を上げたら残れる。でも駄目だったら、即時放校、退学です。でもね、人間てのは頑張れば、とても夢に向かって進むことができるなと思ったのはそのときであります。1 学期で 375 人の農学部の学生がおりました。375 人のうちの 10 人だけがストレート A だったんです。ストレート A というのは、全てのコースが 90 点以上の好成績を修めているということ。そのストレート A を取ったらもう、すごく人生が変わった。

何が起こったかというと、当然、仮入学から本入学になった。そして 2 番目に、全部 A ですから特待生だった。特待生になると授業料免除・奨学金と、それからもう一つ。特待生になると、1 年生のときから教授について研究ができるという特典が付きます。

私の研究のテーマはドクター・ジーママンという有名な先生のもとで豚の精子の保存方法を研究することでした。なぜ豚の精子保存方法を研究する必要があるのかというと、豚の精子だけが長期保存できないからです。牛や人間のように他はみんな長期保存、冷凍保存ができるにもかかわらず、豚だけができない。だから豚の精子をいかに長く保存するか、冷凍保存するかという研究を私は始めました。

もう一つは、熊本にフィアンセを残して渡米したんです。フィアンセがいたのに、農業研修生で渡米した。農業研修生の通訳になったときに、フィアンセ、今の妻に「必ず迎えに来るから待っていてくれ」と言いました。それでも最初、大学入試に落ちたものですから彼女を迎えに行けなかったけれども、今度は特待生になったので、そのフィアンセを呼んで結婚しました。

ネブラスカ大学時代に結婚して子供が 2 人生まれました。だから、子供を育てながら勉強したというのが私のネブラスカ大学時代の生活であります。ただ大学では 1 度良い成績を残すと、それを下げたくない、好成績を保ち続けたいという人生になるんですね。だから、ネブラスカ大学ではずっと勉強して過ごしました。そこでドクター・ジーママンが私に「お前は学者に向いているから、ネブラスカ大学の博士コースに行きなさい」と言いました。「博士コースに行ったら一緒に豚の精子の研究をやろう」と言ってくれた。もう子供が 2 人いるから、もしもジーママン先生の提案に乗るとしたらすごく安定した生活なんですね。奨学金ももらえるし。

2.3. 政治学へ

でも、そのとき考えた。確かにとても素晴らしい提案だけど、今後一生豚の精子を毎日見て生きていくのかと。他に人生の選択肢はないのかと考えたら、政治をやりたいという昔の夢が、

ふと蘇ってきた。そこでジーママン先生に「先生、すみませんけど、私は政治学を勉強したい」と言いました。でも政治学は一度も勉強したことがない。ずっと繁殖生理学、それも畜産学の勉強だったものですから、政治学のような他の分野を勉強する機会はありませんでした。そしたら、ジーママン先生はいい先生だから「わかった」と。「お前の希望通りにやりなさい」と。「それでどこの大学に行きたいんだ」と言われた。もう政治学を勉強するんだったらハーバード大学だとずっと思っていましたので、「ハーバード大学を受けます」と答えました。でも、一度も政治学を勉強したこともないのに、ハーバード大学に出願して、通るとは誰も思いませんよね。

でも私のモットーは「不可能を可能にする」ことですから、ハーバード大学に願書を出した。ハーバード大学は、どちらかといえば名門のお金持ちの入学者が多かったんですね。願書に書く内容は、「あなたは、メイフラワー号由来のファミリーの出身か」とか、「あなたの家族の収入はどのくらいあるか」とかです。私は収入の項目で、「有名な家系でもなく、小作農の息子です。そして貯金はゼロです。家にお金が一銭もありません」と書きました。また子供がもう 2 人いましたから、子供のためにも奨学金が必要だと言ったら、一度も政治学の勉強をしたこともない私をまずは入学させてくれた。それも入学だけじゃなくて、奨学金までくれた。ハーバード大学の授業料は高いので、奨学金と授業料免除の 2 つを提供してくれた。そして何よりも良かったのは、子供がいたので、家族用の学生アパートまで安く提供してくれたことです。そういったアメリカの「人の採り方」にとても感銘を受けて、そのおかげで今、私がここにいるんじゃないかなと思っています。

でも大事なことは、選挙で「不可能を可能にする」候補者像を示すことであり、今とても難しい熊本の政治を、不可能だと思うことをちゃんとやりたいというふうにみんなに訴えた。これがとても効いたのかなと私は思います。

ハーバード大学に行って、私は一生懸命勉強しました。普通は一通りの学問を修めるのに 6 年ぐらいかかるだろうと言われていた。ハーバード大学では一度も政治学の授業をとっていたことがない学生を大体 5〜6 年ぐらいかけて一人前のドクターに仕上げるのが慣例だった。しかし私は 6 年もかけていられない。6 年も勉強に使ってしまっては子供が餓死する。当時は 3 人の子供がいましたから、できるだけ早く卒業したかったので、3 年 9 ヶ月で修了した。早く修了しないと食べていけなかった。そういうプレッシャーを感じることが、人生をしっかりと生きる秘訣ではないかなと私は思っております。博士課程を 3 年 9 ヶ月で終了して博士号を取得し、33 歳でハーバードを卒業し、それで最初に勤めたのが筑波大学です（スライド p.7）。

2.4. 大学教授から熊本県知事へ

筑波大学で講師、助教授、教授と昇進していって、それだけでもとても幸せなことだったん

ですね、仕事があるだけでも。一度も（日本の）大学に行ったこともないのに、よく筑波大学が取ってくれたなと思いました。

ところが、私が 50 歳のときに東京大学法学部が私を呼んでくれた。東大法学部の先生たちは法学部の学生以外をあまり信じませんから、法学部の出身じゃないと教授に採用しない傾向がある。そこで、私が東大法学部の教授に決まったときに、読売新聞がこのように書きました。「農協職員から、東大法学部教授へ　精子から政治へ」[3]。精子の研究をやっていたものですから、「精子から政治」だった。それで有名になったんですけども、そのときに一緒に教授になった人が安藤忠雄さんでした。あの方はボクサーから東大教授になりました。そういう形で 2 人のユニークな東大の教授が生まれたのが 1997 年であります。

そしたら、いよいよ、夢が近づいてきた。私が 61 歳のときに、当時の熊本県知事だった潮谷先生が、知事を辞めると。潮谷知事のときに、潮谷先生の研究で来ていたのが中條さんです。中條さんが 1 年間潮谷知事に密着して本を書かれた[4]。潮谷知事退任のときに、友人たちが選挙に出てみないかと誘ってくれた。選挙に出ませんかと言われたので、私も考えました。いろんな反対があったけれども、何で政治学を勉強しようと思ったかというと、カエサルのような立派な政治家になりたいという思いが根底にありました。それで、政治学を勉強するようになった。

当然、私は知事に手を挙げたんですね。そこで、今日のお話の序盤で私、蒲島は選挙に圧勝しなければいけないと言いましたよね。みんなが私の投票行動理論を信じるためには圧勝しなきゃいけない。そこでさっき言ったように、政党からの公認も推薦も断るし、唯一私が訴えたのは「私は不可能を可能にする人生を送ってきました。私だからこそ、この難しい熊本の不可能な状況を立派な形にできる」ということです。

私を含めて 5 人の立候補者がいて、みんな有力だったんです。そして、私の得票率が 46.7%、次点の鎌倉孝幸氏が 18.3%でした。私が一番貧乏で、一番勉強ができなかったということをよく知っている故郷の山鹿市では、私が 85%も取りました。山鹿市では「知事になった蒲島さんは本当に貧乏だったし、それから、高校の成績も悪かったけども、不可能をも可能にする」、そういう人生を送ってきたことをわかってくれた。だから圧勝したことが大きかった。圧勝して初めて自分の思う政治ができると私は思います。

3. 圧勝と蒲島県政の誕生

知事になったときに、県庁の文化として私が感じたのは、従来の行政は、指導であり、それ

---

[3] 読売新聞 1997 年 3 月 12 日全国版東京朝刊社会 39 頁「農協職員→米留学→豚の精子研究→政治学　蒲島郁夫・筑波大教授、東大が招へい」

[4] 中條美和（2017）『知事が政治家になるとき』木鐸社.

から規制であり、管理・継続型、そして画一型の行政だったということです。しかし、それはおかしいんじゃないかと。私は県民の総幸福量の最大化が大きな目標でなきゃいけないだろうと思った。そこで、県民の幸福の最大化のために、皆さんに「皿を割ることを恐れるな」、「皿を割ろう」と言い続けました。失敗を恐れずチャレンジしようと。チャレンジして、いっぱい皿を割ってもいいんだと。そのようなことを言い続けることによって、熊本県庁を日本一挑戦する集団に改革することができました。これが、その後の熊本県を大きく飛躍させる礎になったと思っています。

3.1. 決断の政治

そして、私がハーバードで教えを受けた先生の中で一番記憶に残っているのはリチャード・ニュースタット先生です。この先生が教えてくれた通りに政策をやった。この先生は何を教えたかというと、「どんな政治家でも、難しい問題には 6 ヶ月で策を講じ、決断すべきだ」と。このリチャード・ニュースタット先生は、複数のアメリカ大統領の補佐官をした方で、ご自身が補佐官を務める中で「難しい問題に手をつけずに放っておいたら、必ず後で大きな後遺症を残す」ということを間近で見てきた人でもあります。

それがまさに 6 ヶ月間の「決断の政治」です。熊本で一番大きな問題は、財政再建。この財政再建については、私は大変驚きました。なんと借金が 1 兆 600 億もあった。しかし、貯金が 53 億しかなかった。そこで、財政再建について私は（就任してすぐの）4 月に方向性を示しました。水俣病、これも 40 年以上熊本県を悩ませた問題であります。そして川辺川ダム問題も長年、熊本を悩ませた問題です。こういった問題に 6 ヶ月間で方向性を示しますと申しました。6 ヶ月間で方向性を示すと言っただけで、マスコミは無理だろう、私の計画は無謀だと思ったわけですね。でも、マスコミの前で無理なことを言うことがやっぱり大事だった。というのは、マスコミと一緒に政策を考えるわけです。どうやってこの知事はやるだろうと。そういう意味では、マスコミの前で、6 ヶ月間で方向性を示しますと宣言したことが良かったと思います。

まず、財政再建にはどのような形で方向性を示したか。とても簡単です。就任当時、財政の一番大きな問題は県の借金が 1 兆 600 億もあったことです。これについて私が示した案は、熊本県知事の給料の 100 万カット。私の月給が 124 万だったんです。100 万カットすると、24 万が手元に残ると踏んだ上での提案でした。しかし、税金は前の年の収入に応じて変わります。そうすると前の年と収入が変わったものですから、14 万しか手元に残らなかった。でも言ってしまったら必ずその通りにしなければいけない。そこで、14 万で生活した。これによって、財政再建が可能になったと思います。また、公務員組合の県庁職員が、3%、5%、7%の給料カットに賛同した。そういう意味では、あの給料カットの決断をして良かったなと思っています。

これ（スライド p.12）が私の就任当時の財政です。当時は 1 兆 693 億の借金と 53 億の貯金

しかなかった。これが、2 期 8 年で 1500 億円以上の借金を削減することができた。貯金は倍にすることができた。もしこの財政再建がなかったら、皆さんも知っているくまモンなんかに投資することはできなかったでしょう。もしこれがなかったら新幹線に投資することもできなかった。でも、6 ヶ月以内に実行したことによって投資ができる。そういう好況になったことを考えると、リチャード・ニュースタットの「6 ヶ月以内にやりなさい」というのは理にかなっており、納得できる。ニュースタット先生の理論の正しさを実感できました。

この他に、川辺川ダム問題については、ダムをつくらないという白紙撤回の決断をしました（2008 年 9 月 16 日）。これは後でまた変わっていくんですけど。それとともに、もう一つの水俣病問題は与野党一緒になって特措法が成立し（2009 年 7 月 8 日）、5 万人以上の被害者の方が救われることになった。この 3 つの問題（財政再建、川辺川ダム、水俣病）に少なくとも 6 ヶ月以内ぐらいに早く手を打ったということが良かったなと思っています。

今でもまだ問題が残っていますので、その問題を私の後継者である木村知事が対応しているところです。木村知事はですね、中條さんと同じく私のゼミにいた人で、私の 1 期目のゼミのゼミ長なんですね。あまりにも優秀だから熊本に呼んで、そして熊本で副知事から知事になって、今一生懸命頑張ってもらっています。そういう意味で、いい人が後継者になったなと思っています。

3.2. 目標の政治

次は目標の政治。決断をして、それに対応したら次は目標に向かっていかなきゃいけない。どういう目標があったかというのを示しますと、まず私の目標は、県民の総幸福量（y）の最大化（スライド p.14）。幸福の最大化を決めるのは経済的な豊かさ（E）、誇り・プライド（P）、セキュリティ・安全安心（S）、そして夢（H）。こういう要因が、県民の幸福度を最大化するというのは、この方程式の示すところです。

$$y = f(E, P, S, H)$$

E=Economy（経済的豊かさ）
P=Pride（誇り）
S=Security（安全・安心）
H=Hope（夢）

そして、熊本県政治で一番有名な政策はくまモンです。このくまモン（K=くまモン）もこの幸福量の方程式の中に入れます（スライド p.15）。

$$y = f(E, P, S, H, \boldsymbol{K})$$

そして、これを微分する（スライド p.15）。そうすると、このような微分方程式になる。

$$dy = \frac{\partial f}{\partial E}dE + \frac{\partial f}{\partial P}dP + \frac{\partial f}{\partial S}dS + \frac{\partial f}{\partial H}dH + \frac{\partial f}{\partial K}dK$$

くまモンを導入することによって、みんなの幸福はどう変わるか、dy を K で微分する。

$$\frac{dy}{dK} = \frac{\partial f}{\partial E}\frac{dE}{dK} + \frac{\partial f}{\partial P}\frac{dP}{dK} + \frac{\partial f}{\partial S}\frac{dS}{dK} + \frac{\partial f}{\partial H}\frac{dH}{dK} + \frac{\partial f}{\partial K}$$

$\partial f/\partial E\ \ dE/dK$は、くまモンがどのくらい経済的に貢献するか。$\partial f/\partial P\ \ dP/dK$は、くまモンがどのくらいプライドに貢献するか。$\partial f/\partial S\ \ dS/dK$は、くまモンがどのくらいこの安心安全、そして、$\partial f/\partial H\ \ dH/dK$は、夢に貢献するか。最後、$\partial f/\partial K$が大事で、くまモンそのものの幸福に対する効果がこれ以外にどのくらいあるかというのを示したのが、このくまモンの方程式であります。

まず、くまモンが生まれたのは 14 年前です（スライド p.16）。2010 年に九州新幹線の全線開通を受け、それをきっかけに誕生しました。くまモンはもともと痩せていました。痩せていたものですから、子どもたちが怖がって逃げるんです。しかし、だんだんだんだん、くまモンが美味しいものを食べてこんなに太ります。そして県庁の臨時職員にくまモンを採用して人気が出始める。もしあのときに財政再建してなかったら、くまモンに投資するなんて絶対許してくれなかっただろうと思います。しかし、財政再建にある程度の効果が出たので導入して良かったなと思っています。熊本県の営業部長兼しあわせ部長に就任して人気者になった。本当はこの会場にくまモンを連れてくれば良かったね。

そして、ある時、前の天皇皇后両陛下、特に皇后陛下から「熊本に今度行きますから、くまモンに会えますか」と直接お話があった。当然「くまモンに会っていただきたい」とお答えしました。実際、会っていただくことができました。これ（スライド p.16 写真）は、くまモンが両陛下の前に立っている写真です。ここに皇后陛下も胸に、今、私がつけている、このくまモンバッジと同じものをつけておられます。そして、そのときに有名な、皇后陛下の質問があります。今でもネットで見られます。どういう質問かというと、「くまモンさんはお忙しいようですけど、お 1 人ですか」と聞かれた。でも答えるのは私ですからね。くまもんは喋れないから、（代わりに）どう答えるかを一瞬ですけど、悩んだ。そこで私は、世界中のくまモンファンが悲しまないように、「くまモンはくまモンです」と答えた。そしたら「わかりました」と言われ

た。そんなこと全く知らない、くまモンはもう堂々と踊っています。

そういう意味で、くまモンが熊本県に与えた効果というのは、経済的効果、誇り、夢、そして安心安全、そしてくまモン自身の存在感がすごく熊本を幸せにしています。くまモングッズ等の売り上げ、14 年間での売上累計が、なんと 1 兆 4596 億円（スライド p.17）。今は 1 兆 5000 億以上になっています。すごいですよね。くまモンは喋りもしないのに、1 人でそんな稼ぐ。こういうくまモンの誕生と成長が熊本をどれほど幸せにしたかを、私は皆さんに知ってほしいし、どういうものが政策でどういうものが政策じゃないかという、線引きはしてはいけない。やっぱり、「どういうことが県民・国民を幸せにするかっていうことをみんなで考えることがとても大事だ」ということを、くまモンが教えてくれています。

どういうふうに、くまモンについて議論ができるかというと、コモンズの理論、共有空間という形で提示することができます（スライド p.18）。例えば、ギリシャ・ローマの公共空間というのがあります。そこは、神殿を中核とする公共空間が形成されています。公共空間は誰でも入ることができ、一元的な権力がない。そこで、友愛と感謝の気持ちで交換を行っている。そして、人々は誰でも自由にそこに行くことができる。公共空間の形成は、お金を払うという概念はなくてみんなフリーであるという、そういう公共空間です。

くまモンも、そういう意味では、この公共空間、ギリシャ・ローマの公共空間とよく似ていると私は思います。例えば、くまモンを中心とした共有空間が形成される。全体をコントロールする者はおらず、各主体が思い思いの形で参加する。それぞれが参加して、自分の経済的な効果を得る。そこは年齢も人種、性別も関係ない。有償ではなく、無償で自発的な参加が基本である（現在外国での使用料は有償）。この木庭顕先生が書いた本の中でそれが書かれていて[5]、このくまモンの共有空間じゃなくてこっちのギリシャ・ローマの公共空間（スライド p.18 左側）が書かれているわけですね。それによく似ているなと。

だからそういう意味では公共空間、ギリシャ・ローマの公共空間と同じであれば立派な政策じゃないか。実は、くまモンは、先ほども言いましたように、新幹線の全線開通を助けるために、我々が導入したものです。そして、新幹線が全線開業したときに、財政課が私のところに来ました。「知事、新幹線が全線開業したので、くまモンの役割は終わりました」と。くまモンはお払い箱で、これからは予算が出ません、というわけです。私は、「とんでもない！」と返しました。というのは、くまモンの共有空間によってどれだけ世界中の人が幸せになったか。だから、その幸せを壊しては駄目だと。そこで、「作者から、くまモンのライセンスを買いなさい」と、言いました。そしてライセンスを買い、買ったライセンスをフリーでみんなに使ってもらった。だから、くまモンの共用空間の中でも多くの企業や人が入ってきて、経済活動をしたんです。例えば、くまモンの共有空間の中に入った人たちがくまモンのグッズを作るんですね。

[5] 木庭顕（1997）『政治の成立』東大出版会.

それによって熊本産の原材料は売れ、熊本の知名度は上りました。そういう意味では、くまモンは理論的にとても正しいことをやったなと思っています。

一つだけ。私のところに、国から国家公務員の人が、財政課長で来ました。その人はとても優秀だったので、私は彼に「あなたは優秀だから、一度国に帰る前にハーバードへ行きなさい」と言いました。そこで、ハーバードに行くために論文があればいいから、くまモンのことについて 2 人で「くまモンの政治経済学」に関する論文を書いたんです[6]。我々は、この木庭先生のギリシャ・ローマの共有空間とくまモンの共有空間を比較して、いかにくまモンが立派な政策であるかというのを書いて中央公論に投稿しました。それが掲載可になったんです。その論文はとても良い論文だったので、彼に、とにかく国に帰る前に「ハーバードに行きなさい」と伝えました。ハーバードに行くときに私が推薦状を書くんですけど、どう書いたかというと、「もしこの人がハーバードを落ちるならば、もう一生ハーバードに推薦状を出しません」。そしたら当然合格しました。後で、入試の成績はどのくらい良かったか聞いたのね。アメリカの大学院に行くためにはみんな、GRE を受けなきゃいけないけど、彼も当然 GRE の試験を受けた。そしたら彼はまず、高校の成績が 1 番だったと。一番日本で難しい進学校で 1 番だった。そして、GRE の結果は英語が 100 点満点中 98 点、数学が 100 点満点だから多分、（200 点満点中で）198 点という GRE の成績では世界一だったんじゃなかったかな。彼は高校時代からラテン語ができていたから GRE の英語ができたんだと思うけど。なんでラテン語を勉強したかというと、「高校の時から東大の木庭先生のところで勉強したいと思ったんです」と。だから高校時代からラテン語を勉強して。やっぱりそういうふうにね、将来性を考えながらやる人生もあるんだと、私は感銘を受けました。

3.3. 対応と転換の政治

そして、2 期目までで、目標の政治を大体達成しました。すると、「3 期目はもうやめて、東京に帰りなさい」とみんな言ってくれたんですね。「もう 2 期でやれば十分だから、また学者に戻りなさい」と言ってくれた。さらに、ちょうど同じ頃、ハーバード大学の友人から、「もし来てくれるなら、ハーバードで調整をするから、うちに来なさい」と言ってくる。私もグラグラっとする。知事を繰り上げて、ハーバードに行こうかなと思いましたけど、友人の五百旗頭真さんが言ったのは、「今せっかく熊本がいい状況だから、今辞めればハーバードに行ったあとで熊本に何かあったときに石を投げられるかもしれないな」と。そしてまさに、3 期目と 4 期目に、熊本地震と豪雨災害という、非常に熊本を苦しめた災害が起こります。そして、それらにどう対応するかというのが、私の 3 期目と 4 期目の大きな課題だった。地震が起きたのがちょ

[6] 蒲島郁夫・正木祐輔（2014）「くまモンの「ロイヤリティフリー」戦略：成功の秘密は「くまモンの共有空間にあった」『中央公論』129(4):124-132.

うど 2 期目が終わる日でね、2 期目で辞める前日の地震が来た次の日に、もし飛行機でアメリカのボストンなんかに行っていたら、本当に石を投げられたかもしれない。ハーバードに行かなくて良かったと思いました。私に与えられた仕事というのは、大きな災害にどう対応するかというのが、最後の仕事ではないかということで、「対応の政治」の難しさ、それをちょっとお示したいと思います。

私が知事になって、2016 年 4 月に熊本地震が起きました。これは 3 期目の就任の当日であります。そして、令和 2（2020）年 7 月に災害（豪雨）があった。これ 4 期目の就任のスタート直後です。ご存知のように、川辺川ダムをつくらないと決めた後に災害があったものですから、もう一度、ダムをつくるかつくらないかというのを決めなきゃいけない。そしてそれ（ダムをつくらないという政策）を変えて流水型ダムをつくる。そういう形に変えてやっています。だから「間違っても変えない」というのは一つのやり方だと思うんですけど、私は自分の政策が間違ったと思ったら、もうそれは変えるべきだということで、4 期目には流水型ダムをつくることを決めました。そして、流水型ダムと緑の流域治水で、清流と人命を両方守るような方式を今、取っています。これ（スライド p.21）は熊本地震の状況です。益城町がほとんど崩壊しました。阿蘇の外輪山もこのように崩壊しました。これにどう対応するかということがとても大事だということです。

私が、3 期目の知事になって最初に「復旧・復興の 3 原則」を地震の 2 日後に決めました（スライド p.22）。そして「有識者会議を作る」と私は県幹部に言ったんです。そしたら県の幹部が言うには、「県民の生死がまだわかってもいないような大きな災害なのに、有識者会議を作るなんて早すぎませんか」と言われた。でも私は、知事の役割はリーダーだから、リーダーがなるべく早く原則や方針を作って、それを提示することが大事だと述べました。そこで私が、地震の 2 日後に五百旗頭真先生に頼んだところ、五百旗頭先生が「承知しました」と述べられ、5 月 10 日、地震の 3 週間後には有識者会議が熊本で開かれ、そして 6 月 19 日には提言をいただいた。この有識者会議の方々はものすごく素晴らしい人たちです（スライド p.23）。この素晴らしいメンバー達は熊本のためにすぐ来てくださって、すぐ提言をいただいた。今、すごい速さで、創造的復興が進んでいます。

また、私が創造的復興を推し進めるに当たって一番勉強になったのは、ハーバード大学のサミュエル・ハンティントンという有名な政治学者のギャップ仮説です（スライド p.24）。

$$\frac{\text{期待値}}{\text{実態値}} = \text{不満}$$

これは簡単です。期待値が分子にある。そして実態値が分母にある。期待値はどんどんどんどん変わるんですね。最初は、災害があっても生きていたら、生きていて良かったと思います。で

も、3 日後には「何か美味しいものを食べたい」、1 週間後には「もっとちゃんとしたところに住みたい」。期待値はどんどんどんどん膨れあがるけど、実態値はなかなかそこについていかない。そうしたら混乱が生じてくる。それで、実態と期待の間のギャップがだんだんだんだん増えていくと、失望と不満が増えてくる。そうならないために、どこに期待値があるかと、期待値が小さいときになるべく実態値を把握して提供することが、災害対応のとても重要な仕事であるというふうに思います。

これがどのくらい速さで復興したか（スライド p.25）。阿蘇アクセスルートは地震後 5 年という異例なスピードで復旧しました。熊本城も崩壊しましたけども、2019 年 10 月にはこのような形で特別公開することができた。だから、予想よりも早く対応することで、不満を生じさせない、これがとても大事です。そして、阿蘇くまもと空港も壊れましたけれども（スライド p.26）、これを民間の委託コンセッションという方式でやって、ものすごい勢いで、阿蘇くまもと空港が創造的復興を果たしています。この阿蘇くまもと空港について、JAL の会長さんが「世界中の空港の中でも、この空港ほどよくできた空港はない」と。そう言っていただいたことを今でも嬉しく思っています。

それから、熊本にはどんどんどんどんクルーズ船が来ています。私は、多くのクルーズ船の拠点を見ましたけれども、どこもみんな暗いのです。何で暗いかというと、貨物船の間にクルーズ船を入れるからです。そうじゃなくてもっと暖かく迎えようと。そこで 84 体のくまモンがお出迎えする（スライド p.27）。世界一大きなくまモンがお出迎えする、そういう形のくまモンポート八代を作りました。ここに世界一のクルーズの会社のロイヤルカリビアンが一緒に投資しています。

私が知事になったときに、熊本駅には新幹線が通りましたけれども、熊本の駅庁舎はとてもみずぼらしかった。もうそれをどうかしたいなと思って、安藤忠雄先生にお願いしたところ、スタッフが言うには、総合企画料が高かったというわけです。「知事、とても払えないです」って。それで知事、安藤先生にお断りしてくださいって言われたけど、私の友人にそんなことを断るかと。それで安藤先生に「私は 14 万円で生活しています。熊本県は財政難です。もっと安くやってください」とお願いしました。安藤先生はえらいですよね。それを聞いて、「わかりました」と。すごく経済的で素晴らしい駅を作ってくださいました（スライド p.28）。この駅があまりにも素晴らしかったものですから、駅舎の落成式のときに私が安藤先生に「熊本の宝を作ってくださってありがとうございました」とお礼を言いました。安藤さんがおっしゃったのは、「そんなに喜んでくれるんだったら、もう一つ宝をあげましょう」と。それがこども図書館（こども本の森 熊本）。素晴らしいこども図書館を作ってくださった。

もう一つ熊本に何がなかったのかと言うと、熊本と宮崎間の高速道路、熊本と大分間の高速道路がなかった。「すべての道は熊本に通じる」というのは私の第 1 回目の選挙の公約だった

んです（スライド p.29）。ところが、1cm もなかった。ただ、政府の支援を受けて道路を創造的復興という形で進めてまいりました。今もう着々と進んで、近く完成すると思います。これが創造的復興で完成することによって、空港ができ、港ができ、そして、道路ができることによって、世界で最大級の半導体メーカーTSMC が熊本に来ることになりました。

4. 創造的復興を超えて

創造的復興を超えること、それは、日本経済の安全保障のために TSMC が熊本に来たことであります。TSMC は半導体の世界的なメーカーで、それが熊本を選んでくれた。それは、熊本があれほど大きな災害に遭いながらも、創造的復興をして道路をつくる力も港も空港もつくる力もあったからであると思っています。また、熊本は地下水もある。そして人材も多い。もう一つは、電力も安い。このような理由から、TSMC が熊本に来ることになりました。

どのくらいのインパクトがあったかというと（スライド p.33）、設備投資額が 2 兆 9600 億円、そして雇用予定者数が 3400 人以上。そこに出資した企業が、TSMC とソニー、デンソー、トヨタが投資に加わっている。九州全体の経済効果が 20 兆、すごいですよね。また、これによって半導体の産業集積強化が図られて、熊本だけじゃなくて、新生シリコンアイランド九州が実現されるとされている。これが日本の経済安全保障の一翼を担うというのが今の政府の考え方です。

だから、政府がこの二つの工場に 1 兆 2,000 億円以上を支援してくださっている。そういう意味でも台湾の半導体メーカーの TSMC の進出は、日本全体に対する効果が非常に大きい。これも諦めずに、とにかく創造的復興という形で災害対応した。災害対応することによって、いい形のものができた。だから不可能を可能にというのは、災害によってもできる。そういうことを私は考えながら政治を行ってきました。

ただ、大きな問題は、確かに国は、大きな額の支援を TSMC に対して行ったんですね。2 兆円以上の資本を TSMC に支援した。でも、交通渋滞が発生する。空港アクセス鉄道が必要になるほど、あの辺が渋滞する（スライド p.34）。下水道処理の整備も必要だし、工業用水道整備が必要だと。これは熊本県が独自にすべきだというのが政府の考え方だったわけであります。でも、それはおかしいんじゃないかと。国策なのに熊本県が負担しなきゃいけないのはおかしいんじゃないかというので、私が 2023 年 8 月 21 日に、岸田首相にお願いに参りました。普通はそこで「ダメです」と言うのが国の立場だと思いますけれども、一番いいときにお願いした。

岸田首相の発言をちょっと正確に見てみましょう（スライド p.35）。ここに書いてありますけれども、私が首相官邸で岸田首相にお願いしたときに、首相が言ったことは、「蒲島知事からは、現地の声としてインフラ整備の必要性に言及がありました。せっかくの民間の投資拡大の動きに、政府がブレーキをかけてはならない。戦略分野の事業拠点に必要なインフラ投資を、

追加的に複数年かけて安定的に対応できる機動的な仕組みを創設いたします。」日本は単年度予算の国です。単年度予算の国に首相が「複数年かけて、ちゃんと対応します」というのは、財務省は驚いたと思います。でも、財務省は、これに対してちゃんと岸田首相の言うように別予算で 10 年間、熊本県に支援をしてくれることになりました。

だから言うことが大事。初めから駄目だと思って何も言わないと何も起こらない。必ず、思ったことを言うのが、政治学者として大事なんだと実際にそう感じました。だから、私が財務省に行くときには、このホームページのコピーを持って、「あなたたちの首相がこう言ったのだから、必ずやってください」と言うんですね。やっぱ書いてあることは大事だね。ですので、ホームページからプリントするのがとても大事だと私は思います。キリストの言葉で、「求めよ、さらば与えられん」というものがある。「求めるべきことは、求める」のがリーダーだ。そういうふうにこれから皆さんも生きていってほしいなとこのように思います。

そして空港の機能強化のために、今はこういう立派な 7 人の侍を（新大空港構想有識者会議として）お願いしております（スライド p.36）。これによって、空港、新大空港構想をあわせてシリコンバレーを作っていきたいと、このように思っています。これが（スライド p.37）、新大空港構想とサイエンスパークであります。空港を中心として、交通ネットワークを作り、シリコンアイランド九州の産業集積をし、それでここに快適な生活ができ、産業力強化の新産業創出等を中心とする都市作りを今からしていきたい。そんなの不可能じゃないかと思うかもしれないけれども、不可能と思った段階で全てを失う。「求めよ、さらば与えられん」という気持ちでね、駄目だて思っても求めればやってくれる。そのたびにずっとその間、その間は人脈作りなんかをしっかりやっていくことがとても大事ではないかなとこのように思っています。

おわりに

今日は皆さんと共に、実証政治学者としての私のこれまでの 16 年間について考えてきました。ここで言いたいのは、逆境の中にあっても、諦めずに、夢を持っていけることがとても大事だと。それによって、不可能を可能にしていく。その歩みが人生ではなかろうかと思います。私は、もう 78 歳の自分の人生を生きてきましたけれども、皆さんを考えてみると、私の 21 歳の時と比べると、どんなに恵まれているか。そう思って、この恵まれた人生を、いかに生きるか。これが、とても大事な課題ではなかろうかと。そう生きることによって喜びが増える。

私は東大教授のとき、何が一番幸せだったかというと、自分の研究が世界に認められ、研究がとても評価されることに喜びを感じていた。でも今考えてみると、それは小さな喜びだったなと思います。私が知事になって、熊本県民のために尽くし、くまモンと共に、熊本県民の喜びを最大化すること。それは私にとって幸せな 16 年でした。それを考えると、「人に尽くす喜び」を、皆さんはぜひ経験してほしいなと。人に尽くす喜びがもっともっと皆さんを幸せに、

そして皆さんを豊かにすると私は思います。

今は、もう私は 78 歳ですけども、今何をやろうとしているかというと、私は自分が知事のときに、半導体の集積を図ること、半導体によって日本の発展を図ること、半導体によって日本人を幸せにすること、それを一番の喜び、一番の仕事だと思っていた。でも、実際に知事を離れてみると、半導体の良いところだけじゃいけないなと。半導体の、この素晴らしい、我々を幸せにする力の反面、例えば、将来この半導体が軍事用に使われることもありうる。だから、東大の先端研で私がやろうとしているのは、半導体の平和利用等の研究基金の設立です。東大の先端研でそれをやっておりますけれども、先端研もお金がないので、研究費用として、昨日、私の退職金の中から一部寄付してきました。熊本県からもらったお金だからね、それをぜひ大きくして世界の平和のために、世界の環境のため活用することが、今は私の喜びです。

何を話そうかと思ったけども、ちょっと難しいテーマでしたけど、実証政治学者が何をやったかということで、そういう「不可能を可能にする」のも可能かなというところをお伝えしました。

＜本論終了＞

＜質疑応答＞

学生：

本日は素敵なお話ありがとうございました。災害の創造的復興というところで、期待とギャップ仮説の話がありました。その際に、期待が小さいときに多くの対応をして、実態を提供するということが重要だとおしゃっていました。これは、創造的復興ということに関してだと思うのですが、例えば、くまモンだと、あんなにすごい大きな売り上げを残して、人気が高くなって、どんどん期待値が高くなっていたと思うんですね。その時に、どんなに上手く実態があったとしても、その実態は期待を超えられないということが多分あったと思います。その際はどのように対応していたのかについて、お聞きしたいです。

蒲島先生：

例えば災害対応の設置はまさにそうですよね。災害対応のときに、日々の対応は期待値が低いうちに、どんどん先を見ながら対応していく。大きな意味での、創造的復興を進めることによって、長期的に見ても、「よく創造的復興ができたな」とみんながしっかり覚えてもらえるそういう想像で、復興をしていかなきゃいけない。

例えば、今日お見せした熊本空港も、もし県庁だけでやろうとしたら、あんな早くできなかったでしょうけど、みんな民間委託した、みんな民間の力。だからそういう意味では、一番できる人たちがそこに登場してくるという、そういう環境を作ることも大事。そういう意味で、小さな期待値のときに、そこで巨大な実態を示さなくていいけども、長期的に何年か先にね、実態はここまで来たのかというのが、本当そこのギャップがものすごく少なくなって、それが私は政治に対する評価に結びついていくというふうに思います。だから、ミクロの部分も大事だけど、マクロもやっぱり大事。

もう 16 年、私知事やりましたけれども、16 年やって思ったのは、これは県のお話ですけれども熊本県の自民党県連が「まだやめないでください」と。4 期やって、5 期目になる時に「やめないでください」と言われたけど、いやもうやめなきゃいけないというふうに考えていた。そのときに、自民党熊本県連が世論調査をした。そしたら「もう 77 歳にもなって、もう早くやめてくれ」という、そういうふうな調査結果なのかなと思ったのですが、「77%の有権者が（知事を）支持している」というから、「これやめられません」て部下に言われたけど、それを見て逆に安心してやめることができました。というのは、次の知事候補が立派な官僚で、素晴らしい実績を残せる人なので。そこで私が感じたのは、「岸田さんが約束してくれたから、借金を残さないで済むな」と思ったのね。借金を残して辞めるのがやっぱり一番政治家としてはきつかったので、そこで私が岸田さんにお願いして、岸田首相が「長期的にこの数年かけてでも、大きな問題に対応できる予算を別枠で用意します」と言ってくれたから、安心して辞められると思いました。だから、もう後は知らんと思ってやめたら（後継者は）きついけど、そうじゃな

くて後の方も考えて 10 年間は一応別枠で予算を出してくれるということだったので、そういう将来への備えはやっぱりしてあげないと後継者はきついなと思いました。だから逆に言えばそこまで配慮しながら、創造的復興をしっかり進めたことが良かったなと思っています。このような創造的復興が長期的な支持に繋がると、評価に繋がるというふうに思います。人生も多分そうだと思います。

教員：

教員から質問です。一つ質問なのですけれども、21 歳のときにネブラスカ大学で「自分はできる」、「不可能を可能にする」と、思われた。そのときの心の動きをぜひ。この子たちの心に火をつけないといけない、でも火をつけるのは我々の仕事なので、またこれは非常に難しいのですけど、ぜひそこを教えていただけたらと思います。どうぞよろしくお願いします。

蒲島先生：

やっぱり、今考えると、私自身が最初ネブラスカ大学で受験に失敗しましたよね。もう全てを捨てて、ネブラスカ大学に行ってそこで試験を受けてやっぱり駄目だったのかと思って。ただ、それに対して、ネブラスカの人たちがしっかりと私を支えて、そして、大学の入試担当者のところに行って応援してくれて、普通はあり得ないことだと思いますけれども、例外として受け入れてくれた。そのときに、普通の勉強をしていたら普通の成績は取れなかっただろうけれども、それに対する感謝を表したいと思って真剣に勉強したんです。だから、その結果として、ストレート A が取れたのだと思います。なので、やっぱり自分を助けてくれた人たちが、必ず皆さんにも出てくると思います。お父さんお母さんも含めて先生たちも含めて、それに対する感謝の気持ちを今、表すんだと。やっぱり、そういう気持ちが、私にとって、結果として成績が良かったことに繋がるのだなと思います。

あと今考えると、人間の遺伝子は天才だろうが普通の人だろうが、大体みんな同じでね。どこに行って遺伝子のボタンを押すのかということが大事なので、「蒲島知事だってあんなできたのだけど、自分たちはもっとできるかもしれない」と思うとほら、自信を持ってできると思います。やっぱり大事なのは、自信ですよね。それをトライするかしないかが、境目です。トライするときに、助けてくれた人、それ（遺伝子のボタン）を押したならば、必ず助ける人が出てくる。例えば、私の最初の選挙の際も、有権者の人が助けてくれたし、東京大学の学生たちも助けてくれたし、みんな助けてくれました。そういう意味で、それを信じて、そのスイッチを押すということができるかが、大事。できるというよりも、「嗚呼、できた」という喜びに変わるのではないかなと思います。

でも、やってみないと誰もわからないのでね。私も自分でやってみてわかったけど、その結果として「不可能を可能にする」ということです。こう見てマクロ的に見ると、よく私みたい

なのが、ハーバードで合格したなと思うし、ハーバードでわずか 3 年 9 ヶ月で修了したなと思います。やっぱやることが大事だなと。ハーバード大で最後に嬉しかったのは、私に研究費を出してくれる研究所の所長が、あまりにも 3 年 9 ヶ月という短い期間で大学を修了したものですから、「お前一度も旅行なんかしたことないじゃないか」と言われました。そういえば旅行なんかすることも全然なかったなと気づいたんです。そうしましたら、その所長が「最後にハワイに寄って来て」と言って家族 5 人のハワイに行くエキストラの旅費の部分と宿の分を渡してくれました。そんな優しさを持つ人々の中で生きてきたことが嬉しかったなと、思いました。

ただ、政治をやってみて、そういう信頼関係を両方で確認できた。有権者や県民よりも私の方が、信頼関係の中で政治ができたことはとても良かったなと考えています。特に、「私が最高に愛する、最高に尊敬している熊本県民が幸せになること」に喜びを感じるし、それに加えて、最後に、「もう 77 歳で、長くやっているので、早く辞めろ」という結果じゃなくて、77%の人が支持率を出してくれたことにさらに喜ぶ。だから相互信頼だな。相互の愛情。それはやっぱり自分も頑張らないと、そうならないと思います。

＜終了＞

写真 1：講演中の蒲島先生

写真 2：講演の様子

＜次頁にスライドが続く＞